アトラスⅠ
見えない三本の柱
正道

目次

第１章　見えない三本の柱
（1）母と子と 3
（2）テピト・テアナの巫女 11
（3）地魔 17
（4）勇者コースタニヤ 25
（5）命の償い 33

第１章　見えない三本の柱

（1）母と子と

テピト・テアナ。

これは島の名前です。三角形が少し押し潰されたような形をした火山島の名前です。

人間も住んでいます。その人口は一千人足らずで、外国との交流はほぼ絶無でした。海の向こうにはまだ見ぬ世界とまだ見ぬ人々がいる、その程度の世界観は持ち合わせていましたが、まさに絶海の孤島に住む人たちと言っていいでしょう。

２０２２-05-30＼(２＼).png

火山島というからには、島には噴火口もあります。つまり溶岩の吹きだし口があるということです。それも一つや二つではありません。大小合わせて二十近くもあります。しかし、そのほとんどが休火山、あるいは死火山であったため、島人たちに危険が及ぶことはありませんでした。

といいますか、どちらかというと、噴火や噴煙による被害よりは、天候による被害のほうがよほど深刻でした。

テピト・テアナに吹きつける西風はひどく荒々しく、その風をしのぐため、島人たちの家は、どこの世帯においても、西側の壁ばかりは、頑丈な石造りにせざるを得なかったほどです。

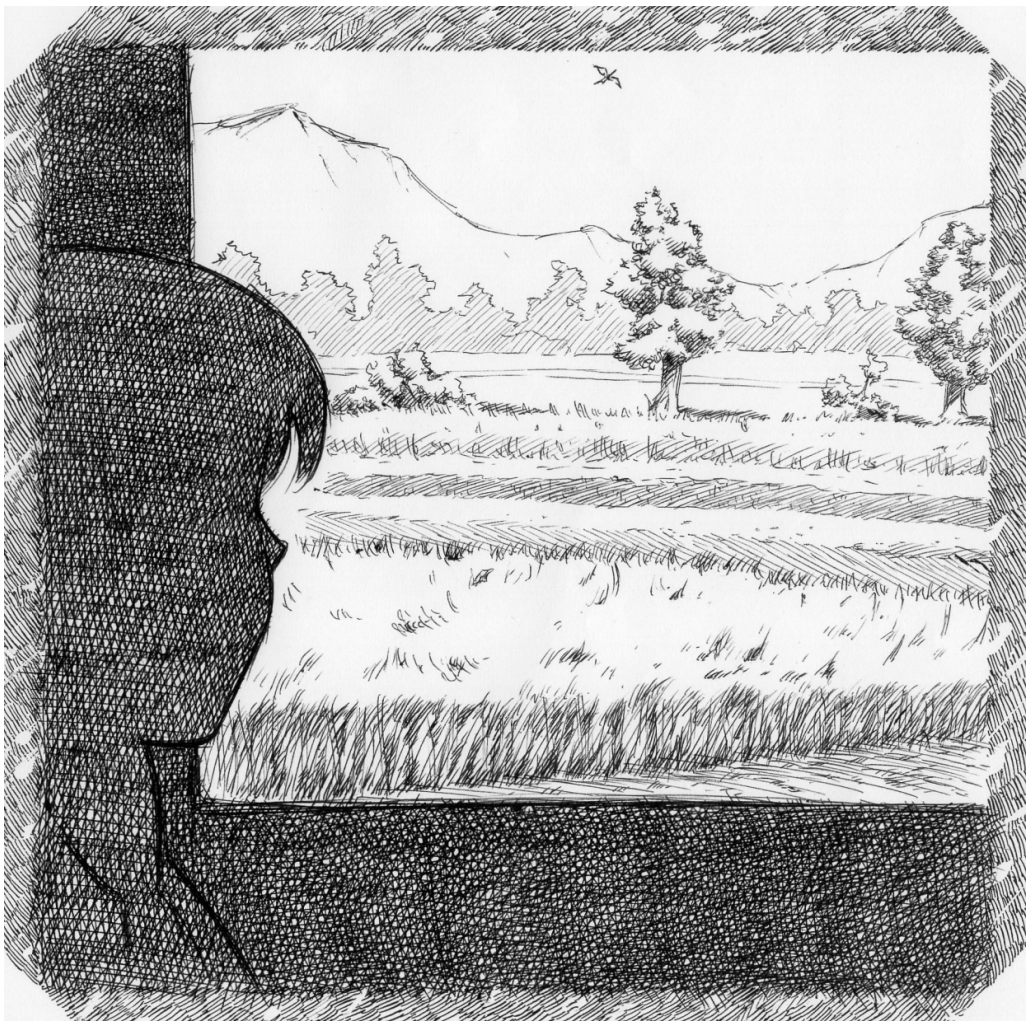
もっとも、そのような風が吹くのは、飽くまでも冬に限られたことであって、今は西風の心配などする必要はありません。なぜなら今は草木萌ゆる春だからです。

ええ、今日のような春爛漫の頃であれば、島の景色は、その全てが美しいのだと島人たちは誇ることでしょう。鳥たちだって実に気持ちよさそうに空を飛んでいます。そこには気が遠くなるほど美しい空が広がっているのです。

窓から空を眺めているオロティアもそう思っていました。なんてキレイな景色なんだろうと思いながら微笑んでいたのです。

そんなオロティアは布団のうえに座っていました。

体が弱い彼女は、このうららかな午後でさえ外に出ることができず、せめて、窓から見える限りの春の景色に、遠い憧れの眼差しを捧げていたのです。それが彼女に味わえる、叶うかぎり精一杯の春模様だったのです。



ｉｍｇ００１.jpg

ふと優しい風がオロティアを包み、彼女はゆっくりと目をとじました。まるで風の暖かさが自分を慰めてくれているような錯覚を起こさせます。

慰め……オロティアの夫は、二月ほど前、不慮の事故によって亡くなっていました。その亡き夫が、風に姿を変えて自分を慰めているような錯覚、そんな優しい錯覚がオロティアの体を包んだのです。彼女は目をとじながら、心ゆくまでその錯覚を堪能しているようでした。

ところが、そうして両の目をつむっているうち、窓から入ってくるはずの風が一切やんでしまい、そのかわりに、オロティアは誰かしら人の気配を受けとめることになりました。

「アサジ！」

目をひらくと、そこにはオロティアの息子であるアサジが立っていました。

アサジはなぜか右目の下を押さえています。そして、オロティアが息子の顔を確かめると、その押さえた手のせいでハッキリしないものの、どうやら涙をこらえているらしい様子が見てとれました。かすかに肩をしゃくり上げているのが分かります。

今年で十一歳になるアサジは、つい先頃から水運びの仕事に就いていました。正確に言うと、父親が亡くなって収入がなくなった二月前からのことです。

島の男たちの仕事は、その内容のほとんどが漁業と農業に占められていましたが、それらに次いで重要とされていたのが水運びの仕事でした。

ここテピト・テアナには、まともな河川と呼べるものが皆無にちかく、散在する村落で用いられる飲み水は、死火山火口のたまり水か、あるいは島にいくつか設けてある、雨水を保存するための人口池から運ぶしか、これを得る手段がありません。

ですから、この水を運ぶ力仕事は、島の人たちが日々生活していく上で、まさに無くてはならないものだったのです。

オロティアの息子アサジも、父なきわが家の生活を支えるため、この重要な仕事に勤しんでいました。いや、勤しんでいる“はず”だったと言ったほうがいいでしょう。

だって、そうやって仕事に勤しんでいるはずのアサジなのに、今は、終業時間を待たずして母オロティアの前に立っているのですから。夕方にならないと帰ってこないはずの息子が、この昼下がり、なぜか家にいるオロティアの前に立ち尽くしているのです。

オロティアは息子の只事でない様子に驚きながらも、すみやかに彼を室内に招きいれました。アサジはしばらく黙っていましたが、やがて、いかにも言ってはならないことを口にするように、まるで母親の視線から逃れるようにして言いました。

「母さん……どうして僕を産んだりしたの」

右のこめかみから目の下まで、という大きな青痣をこしらえたアサジの問いを耳にして、オロティアは、ただ困惑の表情を浮かべることしか出来ませんでした。

「一緒に働いているオジサンが言ったんだ。

『お前の母親はな、あのころ歳が若いうえに病弱だった。なのに無茶をしてお前を産んだんだ。

そうしたら、大方の予想を裏切らず、出産と同時に体の衰えが進んでいき、今では家の外に出ることも出来なくなっちまった。ちきしょう、まったくオロティアがお前さえ産んでいなかったら！　彼女は今ごろ元気になっていたかもしれないのに。くそガキめ、お前さえいなかったら！』

って」

アサジが語る“オジサン”の言葉によって、オロティアには、息子の青痣がそのオジサンに殴られて出来たものであることが分かり、また、その殴ったオジサンが誰であるのかも、明確に見当づけることが出来ました。

ｉｍｇ 002＼(２＼).jpg

　アサジが悲しい訴えを続けます。
「だけど、それが本当の話だったとしたらさ、病弱な母さんが、わざわざ結婚して僕を産むことなんか無かったじゃないか。ねえ、子供を産むのって大変なんでしょう。もし僕を産んでなかったら、母さんだって、今ごろは元気に暮らしてたかも分からないよ」
　オロティアは、息子に座るよう促すと、痛みを与えないように気遣いつつ、その大きな青痣をさすってやりながら言いました。
「言ったのは、顎に赤い髭を生やした人でしょう。
　その人は、むかし母さんを好きだと言ってくれた人でね、私の体を心配して、最後まで出産を反対していた人なの。
　だから、私がこういう体になってしまった以上、生まれてきたお前を憎らしく思わずにはいられなかったのね。お父さんが生きていたら、まずそんなことはされなかったでしょうけど、私のせいで殴られてしまって……ごめんね、本当に痛かったでしょうに」
　俯くアサジを見つめながらオロティアが続けます。
「けれどね、母さんはどうしても子供を産んでみたかった。だからこそお父さんと……ど

んな非難をも受ける覚悟をして、私が妊娠出産することに賛成してくれた父さんと結婚したの」

しかしオジサンに「お前さえいなかったら」と言われ、そのために自分の存在自体を罪悪視することになったアサジは、そんなことを聞いているんじゃない、とばかりに声を荒げました。

「どうして！　体の無理を押してまで僕を産むことないじゃないか！」

そうやって息子になじられる三十路前のうら若き母は、ただ悲しく、力のない笑みを浮かべるしかありませんでした。

「でもね、無理をしなければ、母さんには本当に何もできなかったの。それぐらい、あのころの母さんは体が弱かったから。いつも、今にも自分は死んでしまうんじゃないかって思ってた。それぐらい母さんの体は弱かったの。

そんなふうにね、黙っていても死は近づいてくるのだもの。それならば母さんは、無理を押してでも、したいことをしたかった。分かるでしょう」

「その、したいってことが僕を産むことだったってこと？」

「そう、母さんは、この体の中から新しい命を生み出してみたいと思った。その新しい命を生み出した瞬間に、そのせいでこの身が滅んでしまおうとも、ね」

「そ、それって、自分が死んじゃってもっていう意味？」

「そうよ、私は死を覚悟してた。死ぬこともあるだろうなって思ってた。

でも、私が死んだとしても、私から生まれた命が生きつづけ、そうしていつか、その命がさらに新しい命を紡いでくれたなら……

そう思うと、まるで消えてしまうはずの炎が、やどる松明を変えていつまでも燃えていくようで、それまで死の虚しさに押さえつけられていた胸が、急にふっと安らいだの。

ええ、私自身がどうなってしまうのであれ、子供が、つまりお前が在ること自体が、母さんの慰めになってくれる。そんな気がしたのよ」

「僕があること、そのものが……」

自分が在ること自体が母の慰め、それは、今しがたアサジを殴った男の言葉と、奇妙な対照をみせて響きました。なぜなら男はアサジにこう言ったからです。お前さえいなかったら、と。

すなわち、母の言葉が、髭の男の与えた“存在悪”という蛇の毒にたいする血清の役割を果たしたようなのです。そのため、母の言葉を聴いたとたん、それまで青ざめていた少年の頬に、パッと赤みがさしていくのが認められました。

オロティアの言葉はなおも続きます。

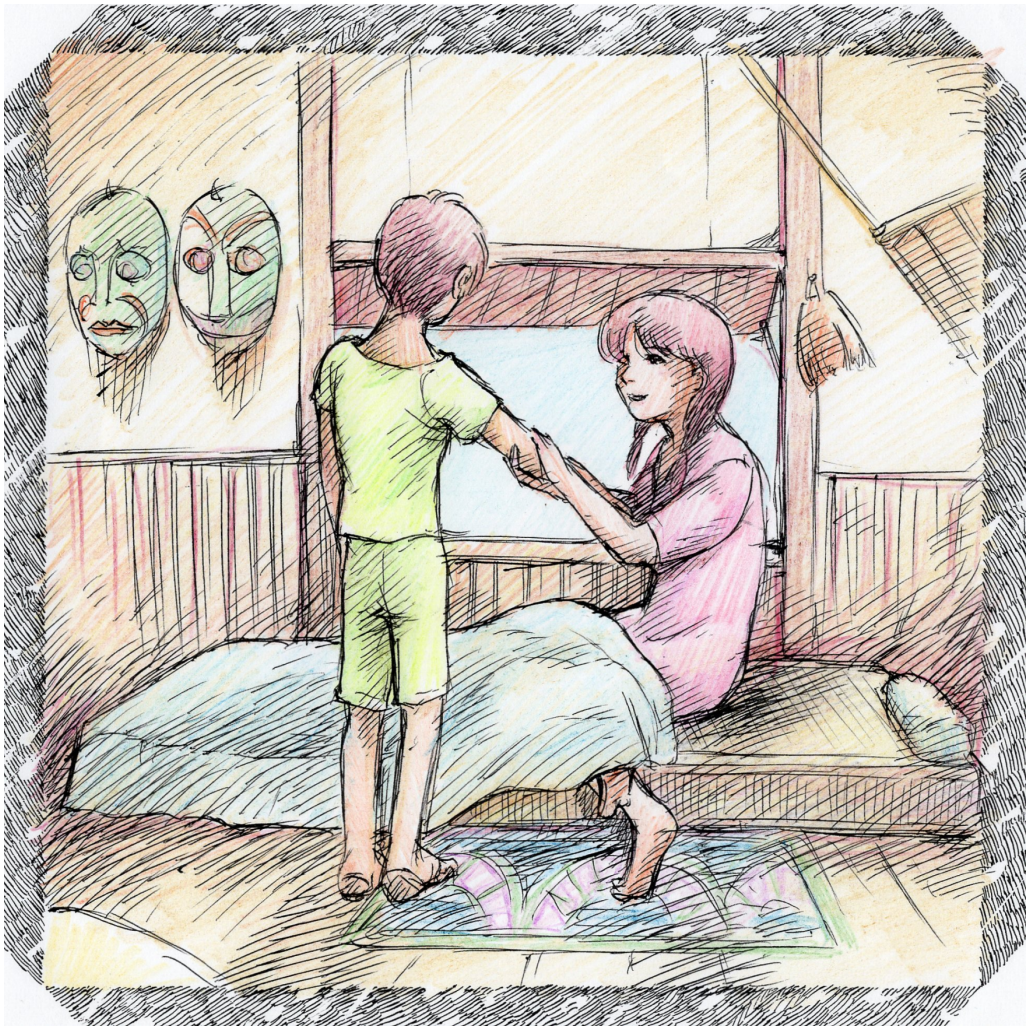
「実際にお前を産んだことで、母さんがどれほどの安らぎを得たことか。

そして、無事に出産を済ませられたこと自体信じられないのに、私はそのうえ、十年以上もお前と共に暮らすことができた。いえ、それどころか、健康そのものだった父さんが亡くなってしまった今も、私はこうしてお前の傍にいられるのです」

あの血色のいい夫の顔を思い出すと、オロティアには、運命の皮肉というものが感じられて仕方ありません。あんな健康な人が私なんかより先に亡くなるなんて、と。

夫だって、きっといつまでもアサジの傍にいたかったでしょうに。それを思うと、た

だアサジの顔を見つめているだけで、大粒の涙が溢れてしまいそうになります。



「母さんは、健康と安定した生活に恵まれている人たちよりも、自分の幸せが小さいものだなんて思わない。ううん、思えない。だって、アサジを産むことで得られた幸せは、そんなものよりも、ずっとずっと大きなものだったんですもの。

　だからアサジ、今度そのオジサンに会ったなら、母さんは誰よりも幸せなんだと言ってあげなさい。僕がいるから母さんは幸せなんだって、そう胸をはって言ってあげなさい。それが母さんの心からの真実なんだから」

　このように母は「お前を産むことで、私は本当に幸せになれた」と言ってくれました。この快雨のような言葉に、てらいや偽りの匂いはなく、また自分を見つめる母の眼差しには、傷つけられた幼い心を癒すに十分な優しさが込められていました。

「うん、オジサンにきっとそう言ってやるよ」

　そう言うアサジの表情には、もはや先ほどまでの険しさは微塵もありません。

　仕事の休憩の場で、とつぜん見知らぬ男に殴られたうえ、あまつさえ、その男に、

「お前は、母親の健康をむしばむためだけに生まれてきたんだ」
　という残酷な言葉を浴びせられたアサジでしたが、母の率直な気持ちを聴いて、やっと子供らしい明朗な気持ちを取り戻すことができました。
　そして、普段と変わらないだけの落ちつきを取り戻したアサジは、その仕事場で気になったことを、何気ない口調で母に問いただすのでした。
「オジサンが僕のことを殴ったとき、まわりにいた何人かがそのオジサンを抑えれくれたんだけどね、そのとき、オジサンを抑えた中の一人がこう言ったんだ、
『今日はこの作業場に巫女が来るかもしれないんだぞ。お前は、島の巫女にこんな姿を見られてもいいのか』って、そう。
　で、その言葉を聞いたら髭のオジサンは急に大人しくなっちゃってさ。まあ、そうなったおかげで、僕はオジサンの手から逃げられたわけなんだけど。
　ねえ母さん、あの乱暴なオジサンを、そんな風に大人しくさせた島の巫女って一体どういう人なの？　　何かすごい力を持った人なの？」
「島の巫女？」
「うん、働きに出るようになってから、やたら巫女、巫女、っていう言葉を聞くんだけど、僕はまだその巫女がどんな人なのか知らないんだ。いい機会だから、母さん、巫女っていうのがどんな人なのか教えてほしいんだ」

（2）テピト・テアナの巫女

　オロティアは少し驚いたような顔をしています。
「私ったら、島の巫女のことをお前に話したことがなかったのね。何より大切なことなのに、それを話し忘れていたなんて、ほんと自分に驚いてしまうわ」
　彼女は、窓の外にひろがる景色を眺めるように促してから息子に語りだしました。
「アサジ、このテピト・テアナはね、さして大きな島ではないけれど、でも世界のなかで最も大切なところなの。なにしろテピト・テアナっていうのは “世界のヘソ” っていう意味なんだから」
「世界の、ヘソ？」
「そうよ、ほら、お母さんのお腹にいる赤ちゃんにとって、お母さんと自分をつないでいるヘソの緒ほど大切なものはないでしょう。それと同じように、この島も “世界” っていう赤ちゃんのために、大切なヘソの緒の役割をしているの」
「よく分からないよ。世界が赤ちゃんだったら、お母さんは何なのさ」
「それは、空の上にある天上界だと言われてるわ」

「赤ちゃんが僕たちの住んでいる世界で、お母さんが天上の世界だっていうこと？　でも、僕はそんな天上界なんてところ見たことがないよ。そんな場所が本当にあるのかい」
　首を傾げてアサジが問いました。
「もちろん見えはしないわよ。見えなくて当然でしょう。だって、お腹のなかの赤ちゃんが、自分の母親の顔を見られるはずがないもの」
「ああ……」
「それと同じでね、守るっていう言葉が完全に満たされているとき、守られている側というのは、その守ってくれている者の姿を見ることは絶対に出来ないものなの。それどころか、誰かに守られているという事実にさえ気づけない」

　いまだに首を傾げるアサジに、オロティアが続けます。
「でも、そんな胎児のような無知の中にあって、ひとり島の巫女だけが、この見えない母の意思を伝えてくれる。つまり私たちに、天上界の意思を伝えてくれると言われてる。ヘソの緒が、母体からの栄養を運んでくれるようにね。島の巫女の言葉は、そのまま天意を伝えるものだと言われているの。

２０２３-04-13 ＼ (12 ＼).png

　そして、このテピト・テアナで、巫女の言葉どおりに生きている私たちは、知らないうちに “世界のへソ” あるいは “天上世界と地上世界をつなぐへソの緒” の役割を果たしているのよ。少なくとも、島人たちは皆そんなふうに信じているわ」

「でも、天上の世界が見えないんだから、巫女の話が本当かなんて、誰も証明はできないよね」

「あら、アサジは証明できなければ何も信じないの？」

「それは分からないけど」

「でも、とにかくこの事は分かるでしょう。自分の母親がどんな姿をしているか知らなくとも、その母親とつながれたへソの緒が切れてしまったなら、お腹の赤ちゃんなんて、即座に死んでしまうしかないという事は」

「うん、まあ」

「私たちがしっかりしなくては世界は滅んでしまうんだから、責任は重大よね。

　だから、私たちテピト・テアナの島民たちは、自分たちが “世界のへソ” という重要な場所で生きていることを誇りに思っているし、その誇りの分だけ、島の巫女と、その巫

女の言葉を大切に考えて生きているのよ。お前を殴った髭のオジサンも、その点では他の人たちと変わらなかったということね」

　オロティアがそこまで言うと、アサジがわずかに悔しそうな表情を浮かべました。
「ふーん、そうなんだ。巫女って何だかすごい人なんだ。そんなすごい人に、今日もう少し仕事場に残ってさえいればなー、僕も会えたかもしれないのに、ずいぶん惜しいことをしたんだ。あのオジサンが殴ってきたりしなければ、実際にこの目で見られたかもしれないのに……ねえ、母さんは島の巫女を見たことがある？」
「ええ、あるわよ。今の巫女さまの名前はセフィーネさまというの。すごくキレイな人で、母さんと同じぐらいの年齢だったと思うわ。本当にキレイな人でね、男の人だったら一目見ただけで好きになってしまうような方よ。ほんと誰もが結婚したがるような」
「僕でもかい」
「ええ、きっと好きになるから結婚しちゃえば？」
「ばっ、なっ、なに言ってるんだよ。母さんと同じぐらいの歳なんでしょう。そんな女の人と僕が結婚するわけないじゃないか」
「あら、じゃあ、お母さんの歳ってアサジにはオバサンなの？　　ひどいこと言うのね」
「えっ、そうじゃないけど……だっ、だって」
　思いきり動揺する息子を見てオロティアが声を出して笑いました。
「冗談よ。いくら好きになっても、巫女さまと結婚なんてありえない。だって、年齢の話をする以前に、セフィーネさまにはもう旦那さまがいるんですもの。でもねアサジ、セフィーネさまにはお子さんもいらっしゃって、その子はお前とお似合いの年頃らしいわよ」
「じゃあ、その子は女の子だってこと？」
「もちろん、きっと可愛い子なはずよ」
　オロティアは冗談めかして言ったに過ぎませんが、アサジはただ今十一歳。女の子の話が一番恥ずかしい時期の子供です。そのため顔を真っ赤にしながら、
「よしてよ、女の子なんて！」
　そう強く言って、どうも怒っているのか、照れているのかはっきりしない表情を浮かべました。そんなアサジを眺めるオロティアは、
（気づかなかったけど、もう、そんな年頃なんだ）
　と、幼い子供だとばかり思っていた息子が、すでに女性を意識できる“男の子”であることに妙な可笑しみを感じ、その息子から顔を背けると声を殺して笑いました。

　穏やかな陽気を惜しみつつ、世界のヘソであるテピト・テアナの季節は、次第に春から雨季へと近づいていきました。これから四、五か月は、ほとんど切れ目もないままに雨が降り続くことが予想されます。
　春の間ずっと、貯水池から村へと水をはこぶ仕事をしていたアサジでしたが、たくさ

んの水が島をうるおす雨季になると、その仕事の内容にいくらかの変化が生じます。

というのは、雨季になると、まず雨の勢いが激しくなってきます。雨粒がほとんど弾丸のように島中を打ちつけます。

すると、あまり底が深くない貯水池では、底に溜まっている細かな泥、主に火山灰なのですが、これがキレイな水と混ざってしまい、せっかくの飲料水が著しく汚されてしまうのです。

ですから、水運び人夫であるアサジたちは、雨脚がおだやかな雨季のごく初期のうちに、まだ清潔さを保っている水を、急いで雨粒が届かない場所へと移しかえなければならなかったのでした。

そしてこの、キレイな水を保管しておく場所には、島の巫女が住んでいる「砦」の貯蔵庫があてがわれます。

その砦が、島のほぼ中央に位置しているのが主たる理由ですが、実際ここには丈夫な屋根もついていましたし、なにより広さの点で相当なものがありました。雨季のあいだ、村の家々には、ここで溜め置きされた水が運ばれることになるのです。

　アサジは大人に混じって水樽をかつぎ、貯水池から砦の貯蔵庫までの道のりを、それこそ数えきれないくらいに何度も往復しました。なにぶんいつ豪雨がおそってくるか分からないので、自然と、人夫たちの作業も急かされることになってしまうのです。

　さて、いつもどおり、アサジが砦の貯蔵庫に水樽を運び入れていたときの事です。
　彼と同じように作業している男たちの傍らに、それまで見たことのない女性が、ひどく疲れている一群の人夫たちを激励している姿がありました。アサジは即座に、
（もしかして、この女の人が島の巫女なんじゃないか）
　と思いましたが、事実、その女性の姿には、彼女が人々にとって特別な存在であることを納得せしめるだけの、それほどにも鮮烈にして澄んだ輝きがありました。
「あれが島の巫女なんですか？」
　見とれつつも、アサジが、隣で同じように女性を眺めている男にそう尋ねると、
「そうさね、あれが巫女セフィーネさまだ。あの若々しさを見てみろよ。子供を産んでいるうえ、もうすぐ三十なんだぞ。なのに、あれはどう見ても少女のようだ」
　そう答えてくれましたが、男は一向にアサジのほうを向きません。石にでもなってしまったように、じっと巫女の姿を見つめているのです。そして、この男と同様に、アサジもまた巫女セフィーネから目を離すことが出来ずにいました。
（こんなにキレイな人がいるものなのか）
　アサジは子供心にそう思いましたが、そうやって所為なく巫女を眺めているうちに、まっすぐセフィーネを目指して走ってくる幼女の姿が目に入りました。その幼女は巫女の膝に抱きつき、セフィーネのほうも、さも愛しげに彼女のことを抱きしめてやるのでした。
「あの子は誰なんでしょうか」
　アサジが、さきほど尋ねたのと同じ男性に問うと、
「あれはセフィーネさまのお子さんだよ。小さいけど、今ちょうど八つだったかな。チェリアさまっていうんだ」
　と、男は、それまで休ませていた手を、ふたたび作業のほうに戻しながら言いました。

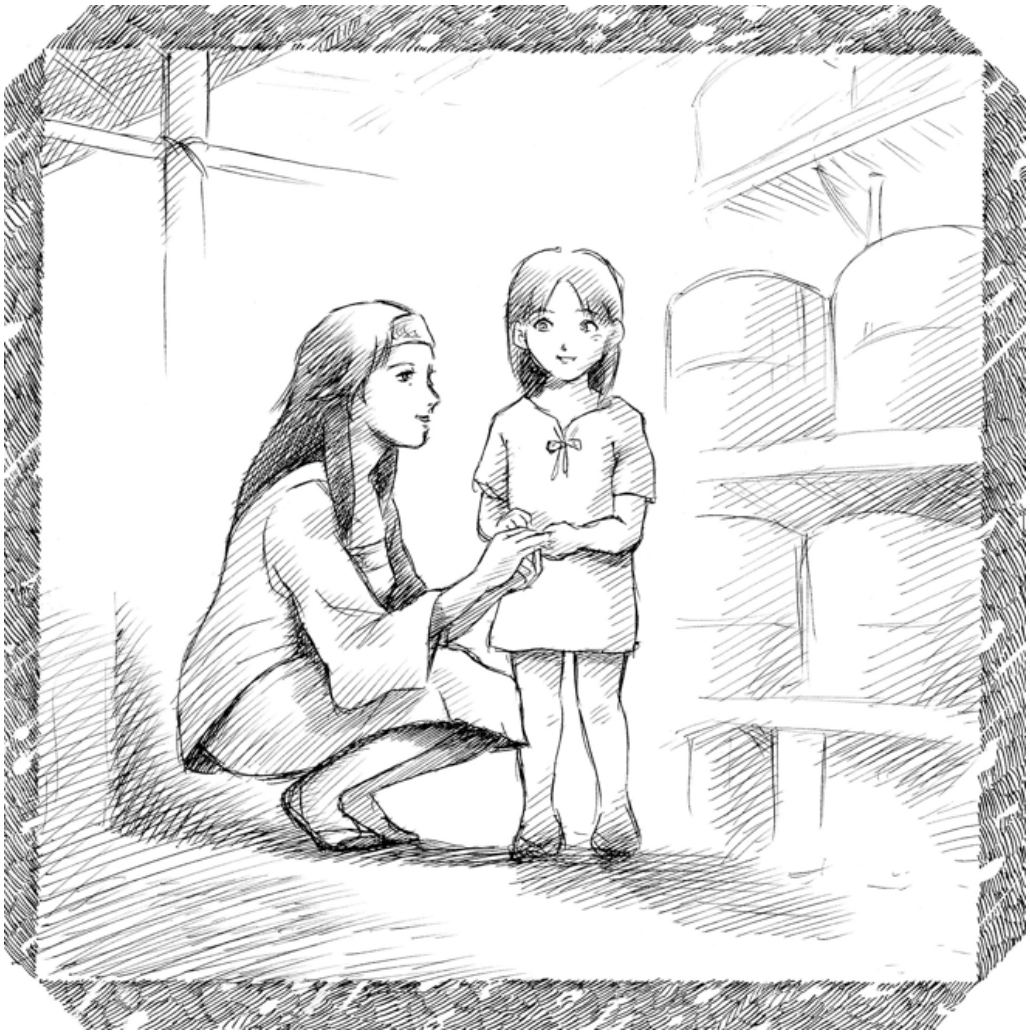
（まるで子供でチンチクリンじゃないか！）
　アサジは、その少女こそが、母の言った「自分にお似合いの子」であることを知ると、自分の歳を顧みることもなく、ただただ母の言葉に憤然とするばかりでした。
（母さんは僕にあの子と結婚しろって言ったわけかい。もう冗談はよしてよ。たしかに歳は三つしか違わないけど、僕は……セフィーネさまのほうがいいな。断然いい。なのに母さんたら馬鹿にして。まったく、帰ったら文句の一つでも言ってやらなくちゃ）
　アサジが本気でそう思ったとき、彼の憤懣に呼応するかのように、頭上から、貯蔵庫の屋根をたたく雨音が一斉に響きわたりました。たいそう大きな音です。ついで、作業のまとめ役の男の声が貯蔵庫内に響きました。
「この雨の勢いじゃ、もう貯水池の水を運んだって仕方ねえ。もうあそこの水は濁っち

まってるだろう。作業はここまでだ。ここの貯蔵庫は水樽で一杯になったことだし、みんな今日は家に帰っていいぞ」

その言葉が終わらないうちから足を動かしていたアサジは、これ幸いとばかりに、（早く家に帰って、母さんに、巫女さまがキレイだったこと、そして、それに比べて、巫女さまの娘が、幼すぎてチンチクリンだったことを言ってやるんだ。母さんを皮肉たっぷりになじってやる。だって、あんな子を僕にお似合いだなんて言ったんだから）

こう胸に誓って貯蔵庫を出ていきました。

しかし、そうやって駆け足で進みながらも、なお未練がましく巫女のほうを振り返ると、そこには二人で遊んでいる、セフィーネとその娘チェリアの姿がありました。



２０２３-04-13＼(７＼).png

（３）地魔

アサジの仕事を中断させた豪雨が降り始めたころ、彼の家には、いつもと変わらず、オロティアが布団のうえに座っている姿がありました。

そうやって、いつもどおりに窓から見える景色を眺めていたオロティアなのですが、不意に雨がふりだし、その雨脚がもはや弱まることがないことを悟ると、めったに戸外に出ることのない彼女も、この時ばかりは、どうしても玄関の外へ出ていかなければなりませんでした。庭で飼っている鶏たちを、雨で体を冷やしてしまう前に鳥小屋に入れてやるためです。

「さすがにこの雨では、大事な家畜を、外に放り出しておく訳にはいかないものね」

そう言って起き上がると、どうしても萎えた足がグラつくのを抑えられませんが、それさえ乗り切ってしまえば、危なげではありますが、オロティアが歩けないことはありません。彼女は雨をしのぐための外套を着ると、おそるおそる屋外へと出ていきました。

小さな庭では、けたたましいぐらいに鶏が鳴きわめいています。おそらく雨に脅えて興奮しているのでしょう。

「そんなに騒がないで。いい子だから小屋の中に入ってちょうだい」

オロティアがそう言うのも聞かず、興奮した鶏たちは柵の中でめいめい勝手に暴れています。それどころか、こうした鶏たちのうちの一羽が、何を思ったか、かがんだオロティアに向かって突進していき、その鋭い嘴でオロティアの右手を突き刺しました。

「あっ！」

そう叫ぶと、健康体から程遠いオロティアの体は、いとも簡単にその場に倒れてしまいました。

そうして泥の上に、いえ、泥の中にと言うべきでしょうか。そこに仰向けになると、オロティアは何度も起き上がろうとしながらも、長い時間、自分の体をどうすることも出来ませんでした。頭を持ち上げようとする度に目がくらんでしまい、結果、その上半身を立たせることすら出来なかったのです。

そんなオロティアの体を、ただ豪雨がいつまでも打ちつけていました。

やがて頭が朦朧としてきて、鶏たちの鳴き声が遠いものに感じられるようになりました。鶏につつかれた右手がズキズキと痛み、自分でもそこから血が流れているのが分かります。その手も、雨と泥のなかで次第に冷たくなっていきました。

と、そのとき、オロティアの耳に聞きなれた声が届きました。

「母さん！」

悲痛な情感は伝わってきますが、そうやって叫ぶ息子の声までがオロティアには遠く感じられます。彼女が熱を出しているのは明らかでした。

「なんだって、こんなことに」

泥まみれのオロティアを背負ったアサジは、泣きたい気持ちをこらえ、どうにか沈着さを保って家に入りました。背中ごしにオロティアが呟きます。

「ごめんね、母さん失敗しちゃったから、アサジが鶏たちを鳥小屋に入れてやってね」

「鶏だって？　よしてよ、そんなの今はどうでもいい。それより手から血が出てるじゃないか。こんなに傷口を汚しちゃって……母さん、早く服を脱いで。そのままの恰好じゃ寝かせられないよ」

母の服を脱がせたアサジは、すぐさまオロティアの傷口を洗いました。

「母さん、だるいかもしれないけど、無理にでも乾いた服に着替えて、それから布団に入

るんだよ。僕はお医者のメーテスさんを呼んでくるから」

　医者のメーテスが到着したときには、オロティアの熱はすっかり彼女の意識を覆ってしまっていました。荒い寝息をたてて横になっているオロティアの姿は、どう見ても重病人のそれでしかありません。
　病気がちのオロティアと顔なじみになっている村医者が顔をしかめて言いました。
「ひどい熱だし、なんといっても元が弱いオロティアの体だ。薬は置いていくが、アサジ、まず一週間は気が抜けないものと思え」
　このように言われたアサジは、まだ幼い身でありながらも、まったく眠りにつくことなく母の看病を続けました。二日にわたって、必死な気持ちがずっと彼のまぶたを押し上げていたのです。
（目をつぶりたくない。一度でも視界から母さんが消えてしまったら、それきり二度と会えなくなるような気がする）
　そうして、その調子のままに迎えた三日目。
　外は曇り空ですが、それでも朝が訪れたことを知ると、アサジは、もはや我慢できそうにない睡魔のなかにまどろんでいきました。ところが、そのまどろみが眠りへと変わっていこうとするその時に、アサジの耳に懐かしい声が聞こえてきたのです。
「アサジ……」
　それはもちろん、いつの間にか意識を取り戻していたオロティアの柔和な声でした。そうとうの汗をかいたので幾分かやせて見えますが、そこには、以前となにひとつ変わらない母の優しい眼差しがありました。

「だ、大丈夫なの、母さん」
　オロティアが、睡眠不足のために血色が悪くなった息子の手を握りしめて答えました。
「うん、大丈夫。それよりお前、ずっと看ていてくれたの？」
「ん、まあね」
　アサジは照れて笑いましたが、母親の元気な顔を見て、それまで抑えていた眠気が一気に吹き出してきたのでしょう。いきなり大きなアクビが出そうになって、アサジはそれを無理やり呑み込もうとしました。
　しかし、いかにも不自然なことをしたために妙な声を出してしまい、その声を聞いたオロティアともども笑いが止まらなくなってしまいました。
「やだ、お腹いたい。アサジ、もう、病人をこれ以上苦しませないでちょうだい」
「だって、アハハハハ」
　そうして笑ったまま、オロティアは息子を自分のほうに引き寄せました。そして、アサジが嫌がるのを宥めるのに時間がかかったものの、まもなく親子はひとつの布団のなかで寄り添いました。オロティアは息子と二人で眠ろうというのです。
「ねえアサジ、腕まくらして」
　母の唐突な願いに照れながらも、アサジはその手をオロティアの頭の下に滑り込ませ

ました。オロティアがアサジのほうを向くと、こめかみにアサジの温もりが伝わり、その温もりが、なぜか彼女の目頭を熱くさせました。

そうしているうちに、屋根をたたく雨の音が部屋のなかを騒がせましたが、暖かな布団のなかで温もりを分け合っている二人には、その音が心地よい子守歌のように感じられるのでした。

この日の夕方に親子が目をさますと、オロティアの体は、もうすっかり、とまではいかないものの、かなり元通りちかくまで回復しており、アサジが仕事に復帰するのに何の支障も与えないまでになっていました。

ただし、なお一抹の不安が残るので、アサジは自分の仕事を、いちおう午前中のみに専念させることを決め、午後は母の世話に徹することに決めました。

収入が減ることは必至でしたが、しかし都合のいいことに、別のところから、日々の食物を得られるメドが立ったのです。

以前にアサジを殴った男、あの赤髭を生やした“オジサン”ですが、ふと彼がオロティアの見舞いに訪れました。そうして男は、オロティアに向かって、自分が毎日アサジに食材を持たせると約束したのです。

「心配するな。仕事場でアサジ君に食物を渡すから、君は、仕事から帰ってきた息子から、それを受け取ればいい」

赤髭の男としては、むかし好いた女が病気だということで、少しでも力になってあげたかったのでしょう。もっとも、昔と変わらず、今もオロティアを好きなのでしょうが。

なんにせよ、この赤髭の男からの差し入れのぶん、オロティア家では、そう生活に困ることにはならなさそうでした。

午前中は水運びの仕事、午後は母の世話。一週間あまりもこうした暮らしが続き、日々の平穏さのなかに、アサジの不安も大方は洗い流されていきました。

ことに夕方に母と粥を食べるのは、少年にとって何より楽しい一時となっていました。なにしろ、赤髭の男の差し入れによって食事の内容が非常に充実していたのです。

アサジはこの日も、赤髭の男から渡された魚をだいて帰宅し、近ごろでは習慣じみてきた動作でもって、母に代わって厨房に立ちました。

テピト・テアナでは米が貴重品なので、粥は少量の米と、たいがいは白身の魚をすりおろしたものを混ぜて炊かれます。赤髭の男はオロティアのために、毎日新鮮な魚を仕入れているらしく、彼女は、その粥の味に大変満足していました。

ところが、今日にかぎって、オロティアは夕食の膳を前にして浮かない顔をしており、粥もいつもの半分ほども食べずに匙を置きました。

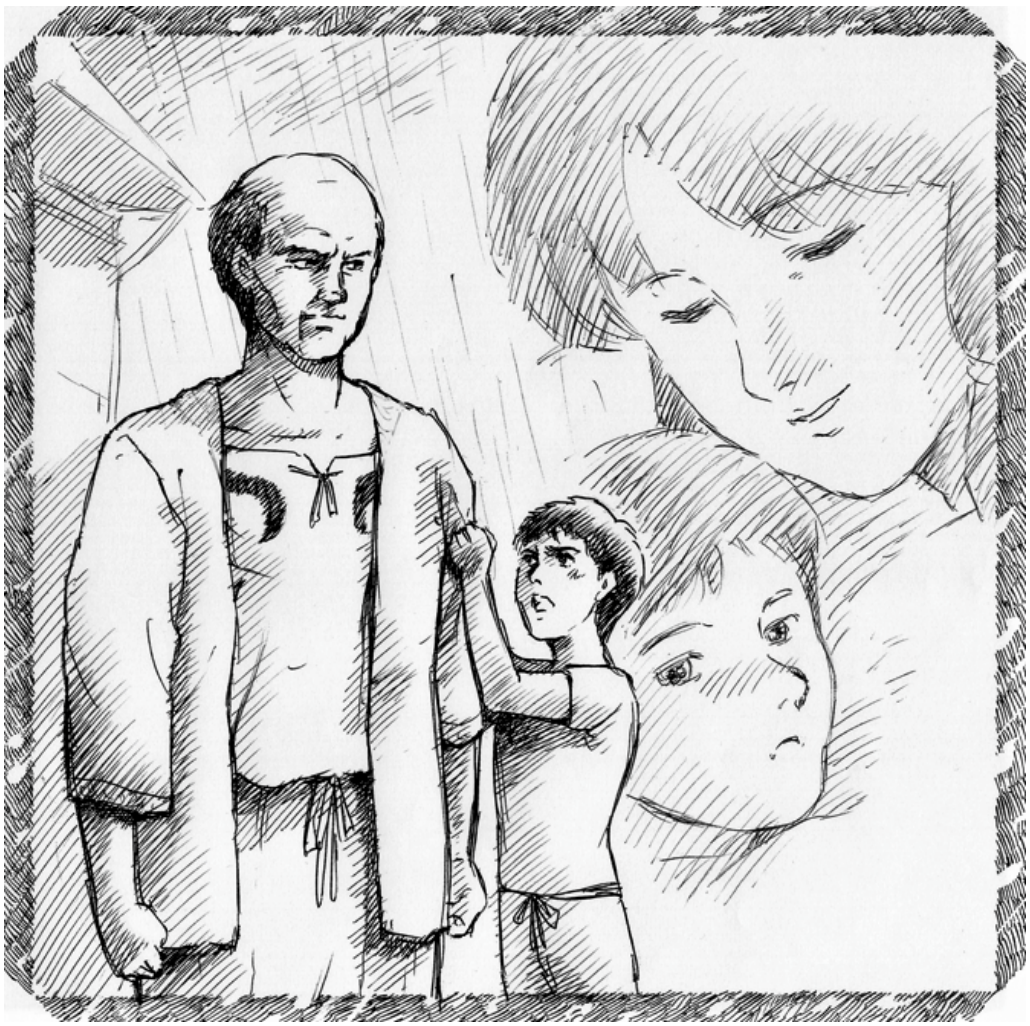
「どうしたのさ、こんなに残しちゃって」

アサジが、そう心配して尋ねると、

「べつに食欲がないっていうんじゃなくて、どうもね、何だか物が噛みにくいの。思うよ

うに口を動かせないような感じで。大した事はないんだけど、でも今日はいいわ。ほんとうに美味しいお粥なのに、ごめんね、明日は食べるから」
　と、このように詫びながら息子の頭をなで、そうして手を動かすたびに「心配ないわよ」と繰り返して言いました。その愛撫は、しだいに冗談じみた激しさを増していき、アサジが笑って逃げ出すまで、しつこいぐらいに続けられました。

　ですが、翌日の昼食でもオロティアは食事を残し、アサジと一緒の夕食においても、やはり前日と同じような残し方をしました。
（こんなに残すなんて絶対におかしい）
　母の様子に不吉なものを感じたアサジは、ふたたび医者のメーテスを家に呼びました。そして、彼によってオロティアの問診が行われたのですが、アサジは、この問診を済ませた医者の表情のなかに、自分を底なしの不安に引き入れずにはおかない、ひどく沈痛な翳りを見ることになりました。
　そのメーテスがアサジを家の外へと連れ出します。
「まずいな、ものが噛みにくくなったり喋りにくくなるのは “地魔” の典型的な症状なんだ。右手の傷から地の毒が入ったらしい……こいつは危ないかもしれないぞ」
「危ないって、先生どういうことですか」



アサジは、しがみつくような目でメーテスに尋ねます。
「あ……いや、とにかく栄養をとることが肝要だ」
「ごまかすなんてやめてよ。まるで助からないみたいじゃないか、助けてよ！」
　しかしメーテスは、黙ってオロティアの家から離れていってしまいました。
　地魔とは、私たちの言葉でいう破傷風のことで、当時のテピト・テアナでは不治の病とされていたのです。つまりオロティアの病気は、治る見込みがないということです。そのため、医者のメーテスには、この親子にかけてやる言葉が見つからなかったのでした。
　アサジは泣きたくて仕方ありませんでしたが、母を心配させないためにはそうもいきません。しかし、空がアサジの代わりに泣いたのか、この日からテピト・テアナでは切れ目のない、強い雨の日々が始まりました。

　以後、オロティアの病状は悪化の一途を辿っていきました。
「ア、アサジ、何だか話しにくくって……ごめん、今日はご飯は食べら、れない」
　たいして日が経たないうちに、オロティアは食事がまったく取れなくなり、そのかわ

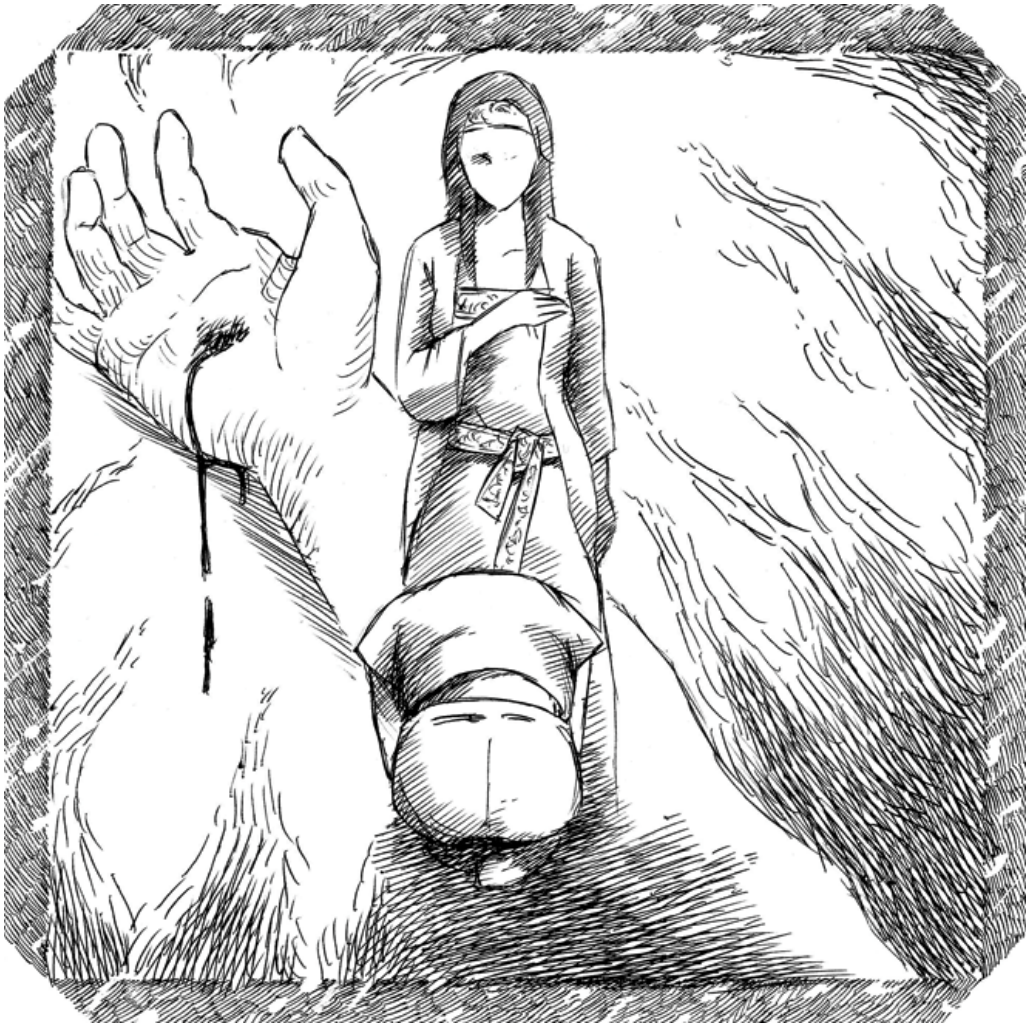
り、全身に震えの兆候が見られるようになりました。
「どうすればいいんだよ！」
　アサジはそう嘆くこと度々でしたが、嘆いて何が変わる訳でもありません。
　しかも、生活の為には、アサジはそれでも働かなければならず、仕事中、自分と離れた場所で苦しんでいる母を思うと、その不安は、母と一緒にいるときよりもずっと深刻なものになっていくのでした。
　そのような不安を抱きつつ、アサジが砦の貯蔵庫で働いていると、ふと彼に向かって声をかける者がありました。
「どうしたのです、あなた。そんなにも辛そうな目をして」
　アサジが、ほとんど何も見ていないような目を向けると、その声が、なんと島の巫女の声であることが分かりました。巫女セフィーネが、アサジのその絶望の淵を呈しているような姿を見かねて声をかけてきたのです。

２０２３-04-13＼(10＼).png

　アサジは、初めて間近で見る巫女の美しさに圧倒されました。そして、その感銘のなかで、かつて母が言っていた言葉が急に思い出されるのでした。すなわち、
「島の巫女は、天上の世界の意思を伝える人なのよ」という言葉です。
　そのためアサジは巫女に向かって叫びました。まさに思いの全てをぶちまけるようにして、泣きながらです。
「天の意思を伝えてくれるという巫女さま。誰より偉い巫女さま。どうか、その天の力で僕の母さんを助けてください。不思議な力で母さんの命を救ってください！　お願いします。どうかお願いします！」

（4）勇者コースタニヤ

　アサジの切迫した様子に驚いた巫女は、とりあえず泣いている少年を砦の居住区に連れていきました。つまりセフィーネたちの住まいにです。そこで少年に、訴えの詳細を語ってもらうことにしたのでした。
「どうぞ、その辛い胸の内にあるものを教えてください」
　どちらかというと訥弁のアサジは、そこで一言一言を噛みしめるように、また何度も涙を流しながら母の病気について説明しました。
「……それで、今は、その震えが一日中とまらないぐらいなんです」
「それは紛れもなく地魔の症状。地の毒が、あなたのお母さんの中に忍び入ったのですね。たしかにそれは、村医者にどうこう出来ることではありません」
　セフィーネはそう嘆息しながら言いましたが、アサジは畳みかけるように、必死の形相で嘆願を続けます。
「母さんは、もう明日死んでもおかしくないような有り様なんです。どうか助けてください。巫女さまに出来なければ誰にも出来ないことです。お願いします！」



２０２３-04-13＼(13＼).png

　巫女セフィーネは、印象的な瞳と整った顔立ち、そして夢のような白桃色の肌を持った女性です。しかし、アサジの嘆願を前にして、いまは、その白い肌が、鈍い青色に変わるほどの苦しみに苛まれていました。
「私も出来るならあなたのお母さんを助けてあげたい。いえ、島の人間であるなら、どんな者の悲しみも癒してやりたいのです。しかし、私はその手段を持ち合わせていません」
「そんな……」
「私は万能の女神ではないのです。巫女である以上、たしかに天上の意思を感じ取ることは出来ます。ですが、そのことを通して私が皆さんに伝えられるのは、人が生きる指針であって、人の命そのものではないのです。
　私は死に対しては無力です。アサジさん、どうか無力な私を許してください」
「そんな事はありません。お願いです、どうか母さんの命を助けてください。そのためなら何でもします。一生をかけてもご恩に報います。ですから、どうか今は母さんを助けてあげてください。お願いです、お願いします！」
　巫女には、アサジの母親を助ける手段など、本当にありはしませんでした。しかし、ま

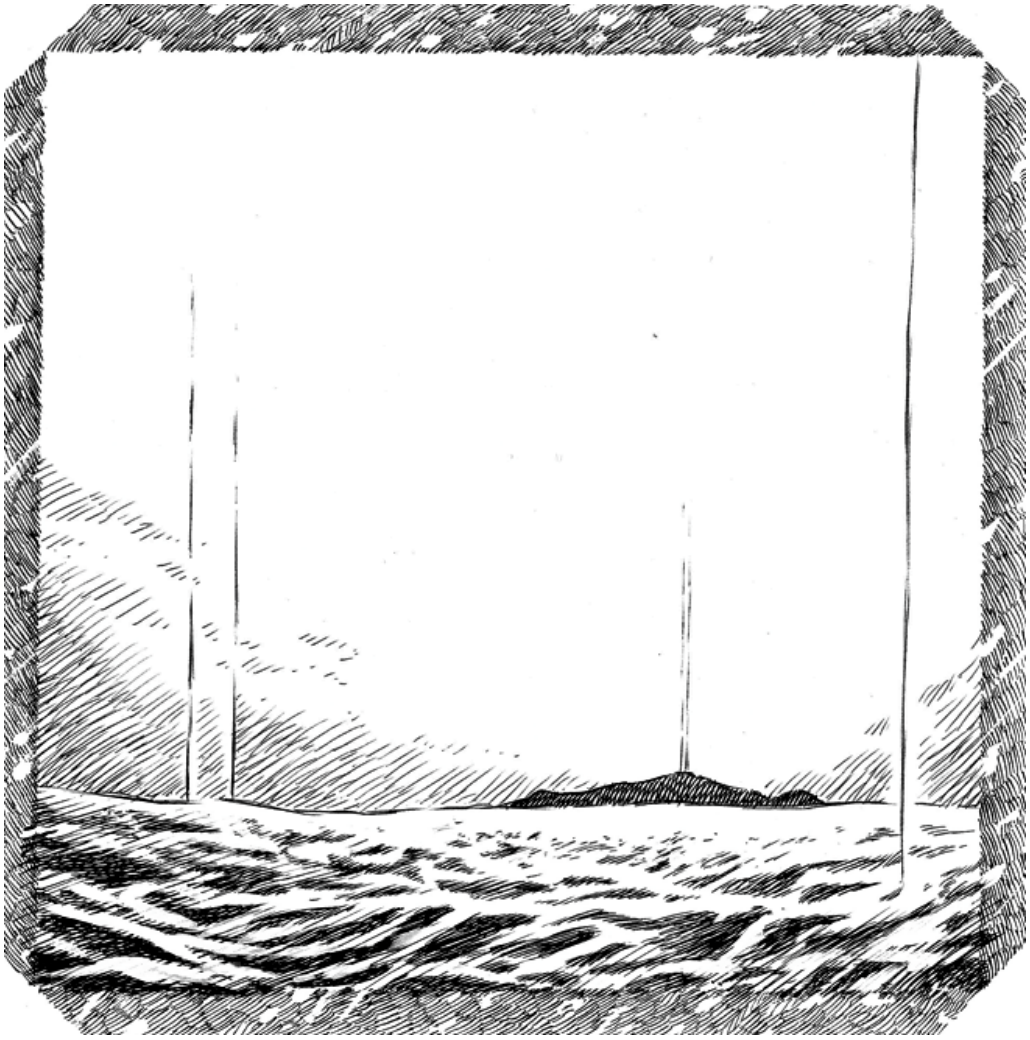
だ幼い子供の口から、こうも切実な嘆願を聞かされては、何もしてやれないのが分かっていても、彼女の心は大きく揺り動かされない訳にはいきません。
「分かりました。出来うる限りのことはやってみましょう。
　ですが、その結果として、やはり何も出来なかったと、そう言わなければならなくなるかもしれません。いえ、その可能性のほうがずっと高いのです。どうか、そのことだけは心に留めておいてください」
　そう前置きすると、セフィーネは遠い砦の奥へと消えていきました。
「どうか……どうかお願いします」
　アサジは、そう言って床に頭を擦りつけると、砦に住む人たちの邪魔にならぬよう、建物の隅のほうに身を置いて、そこで母が回復することを必死で仰ぎ祈りました。

　さて、アサジの面前を去ったセフィーネの進む先には、砦内に設えてある、少々不気味な感じのする、薄暗い書物置き場がありました。
　そこには、歴代の巫女たちが書きつづってきた何百冊もの書物が残されており、この書物群こそが、もっぱら巫女たる者の豊かな知恵の源泉となっていたのです。セフィーネは、この書庫に籠ることで、どうにか問題解決の糸口を見つけようとしていたのでした。
「歴代の巫女たちの知恵よ、どうかこの頼りなき身を支えてください」
　そう言ってから書物を開きはじめ、ここにセフィーネの静かな戦いが始まりました。とにかく多くの書物を征服しようというのです。しらみ潰しに書物を手に取り、読み、読み、読み、そして少しの休憩を、と思ったときには、すでに二時間ほども過ぎていました。そして、その休憩もそこそこに、書物との戦いはまたさらに続けられたのです。
　しかし、そうしているうちに、彼女はとうとうある文章に目を止めました。アサジの母親を助けるのに役立ちそうな、そうした薬の説明らしいものを見つけたのです。
「これならば、もしかしたら何とかできるかもしれない」
　その薬は、どのような病気に対しても効能がある、一種のサンゴだと書かれてありました。このサンゴは雨季になると海のなかで産卵するのですが、この卵こそが、求めるべき薬になるというのです。
　ただし、それだけの話だったら良かったのですが、厄介なことに、このサンゴは「見えない三本の柱」の中に生息していると付記されていました。見えない三本の柱、その柱の中でのみ、このサンゴは生を保てるというのです。

　説明しましょう。
　テピト・テアナは、物語の冒頭で記しましたとおり三角形をした火山島です。そして、その三角形の各頂点にあたる場所には、奇しくも同じように大火山が聳えていました。つまり三つの大きな火山があるわけです。
　これら三つの大火山が聳えていることは、まったく見たままの事実であり、当然のことながら、島人でこれを知らない者はおりません。
　しかし、その三つの大火山がある場所の沖合に柱が立っていること。しかも大人十人

でも抱えきれないほどの太い柱が立っていることは、一般の島人にはほとんど知られていませんでした。

　その柱も大火山と同じように三つあるのですが、このことを知っている島人は、ほとんど皆無に近いのです。



２０２３-04-13 ＼ (17 ＼).png

　その理由は、この柱というのが、普通の人間には、見ることも触ることも出来ない代物であるためでした。この奇妙な柱を見ることが出来るのは、巫女の血統を受けつぐ者だけに限られていたのです。セフィーネが知るかぎり、この柱が見えるのは、母と自分、そして幼い娘チェリア以外にはいませんでした。

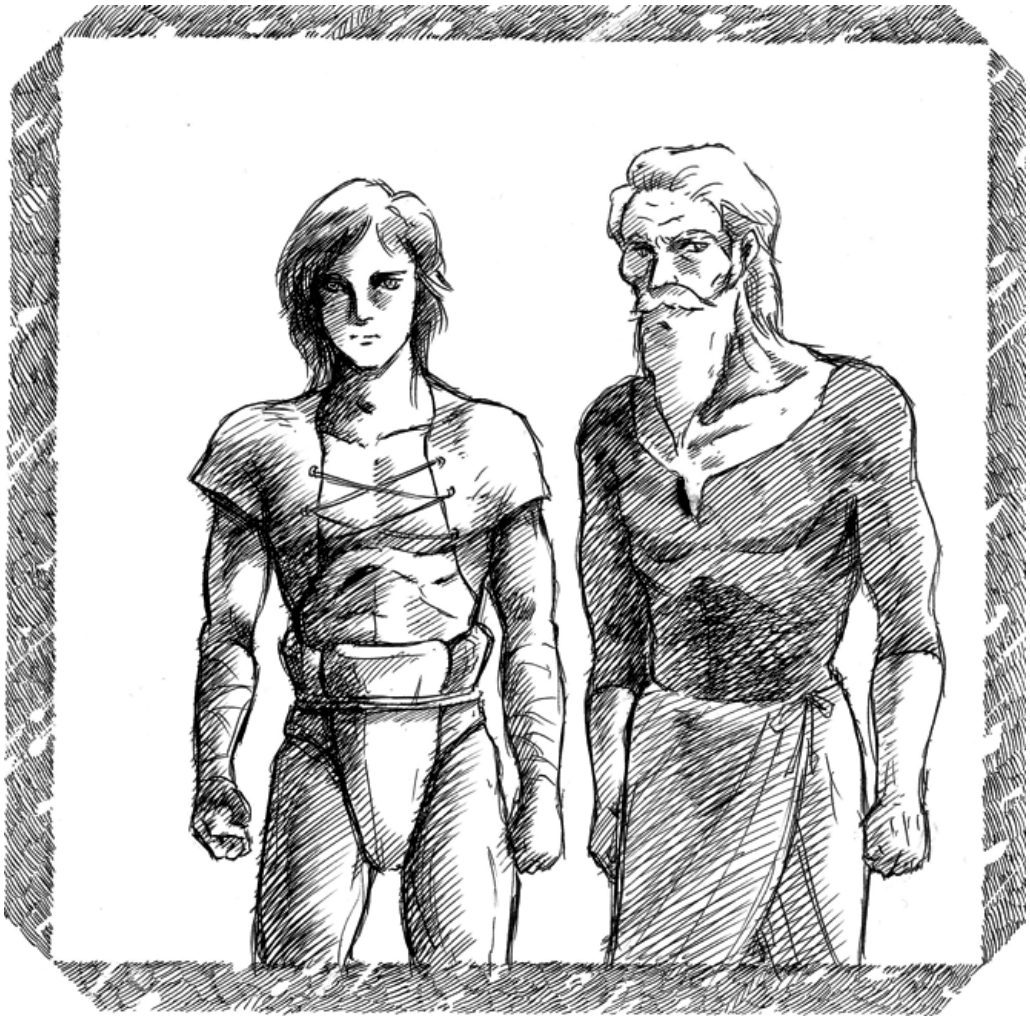
「それゆえの “見えない三本の柱” なのだけれど、サンゴはこの柱の中でのみ生息しているという。そうだとしたら、それを採るためには、巫女である自分が船に乗らなければならない。船に乗って島を離れなくてはならない。だって柱が見えなくては、求めるサ

ンゴの場所自体が分からないのだから。でも……私には、巫女の第一律がある」
　巫女の第一律、それは巫女にとって一番大切な戒律、掟のことです。
　そして、その掟の内容というのが「巫女は島を離れてはならない」ということでした。なぜなら、巫女が島から離れると、かならず島民のもとに不幸が訪れると言われているからです。

「サンゴの卵を採りに行くというならば、巫女である自分が行かなければ……あるいは、誰かが行くとしても、そこに私が伴わなければならない。
　けれど、私が島から離れることは掟が許していない。
　しかも外は今日も雨。かなり激しく降っているし、しばらくは弱まる気配がない。この分では海も荒れているだろうし、そうだとすれば、船に乗った私自身が、生きて帰って来られるかどうか分からない」
　こうして頭を抱えずにいられなくなった巫女の耳に、早歩きの足音と一緒になって、しわがれた老人の声が聞こえてきました。
「セフィーネ、話は侍従から聞いたぞ。まったく厄介なことになったの。どうじゃ、何か目ぼしいものは見つかったか」
　声の主は、セフィーネの父である、先代の勇者バッティーヤです。
　勇者とは、ある競技会で優勝した「島でもっとも優秀な男性」のことでした。
　この勇者に選ばれた男性は、自動的に巫女と結婚することになります。つまり、セフィーネは、先代の巫女と勇者の間にできた子供であり、それゆえバッティーヤは、セフィーネの父にあたる訳です。
「お父さま、いらしてたんですか」
　バッティーヤが書庫に入りながら答えます。
「ああ、雨でびしょ濡れじゃがな。ついさっき外から戻ってきたんじゃ。今のところチェリアの相手をしておるが、コースタニヤもおるぞ。わしと一緒におったんじゃが、砦の入り口でチェリアにつかまってしもうた。遊ぼうと言われてな。
　まあ、日が暮れてからしばらく経つ。チェリアが眠ってしまえば、あいつもすぐにここに来るじゃろうて」
　すでに老勇者と言っていい歳のバッティーヤは、数十年にわたって務めてきた勇者の座を、妻である巫女とともに一昨年前に引退していました。現在の巫女と勇者は、むろんセフィーネと、その夫であるコースタニヤです。

「おお、どうやら来たようじゃ」
　老人が廊下に目をやって言うと、セフィーネの耳にも力強い足音が聞こえてきました。やがて父娘は、書庫の入り口に勇者コースタニヤの姿を見ることになりました。
　そして、そのコースタニヤは、すぐさま、
「いかがですか、セフィーネさま」
　と、その人柄がそのまま表れたような、優しく人を気づかうのが板についた声で尋ね

ました。また、その「いかがですか」という問いかけには、そのまま「私は巫女のために何ができますか」という気持ちが含まれていたと言えるでしょう。



「お父さま、コースタニヤ、とりあえず、このページを読んでみてください」

　セフィーネは、少し辛そうな表情をして、あのサンゴのことが書かれている書物を見せました。もちろん二人とも「見えない三本の柱」のことは聞き知っています。そのため、差し出されたページを読めば、巫女の気持ちはすぐに察することが出来ました。

「問題は二つ。まず巫女の第一律のことじゃな」

「ええ、巫女は絶対に島の土から足を離してはならない。もし離したならば、その時には巫女に、そうでなければ巫女不在の島に、かならずや大きな災厄が降りかかるだろう。そして、この災いは決して克服できないだろう……これが昔から権威をもって伝えられている、巫女の第一律です」

　セフィーネは拳を握りしめて言いました。

「でも、サンゴの卵を採りに行かなかったとしたら、たとえ巫女としての私が満足しても、人間としてのセフィーネが後悔することも分かります。

　そして、その後悔は、きっと私のこれからの人生に、ずっと濃い影を落とすことでしょ

う。あんなにも必死な子供の願いから逃げ出すなんて、とてもそんな自分は許せません。
　ですから私は、掟を破って島を離れたとしても、後でそれを後悔したりすることは決して致しません。それは絶対に誓うことができます」
「じゃが……」
「そうです。本当に恐ろしいのは、この時化の海に船出した私が、命運尽きることによって、二度と島に帰れなくなることです。実際、外はひどい雨ですし、もしそうなれば、テピト・テアナには巫女がいなくなってしまうのですから」
　そう言うと、セフィーネはさも無念そうに再び拳を握りなおしました。

「セフィーネさま……」
　コースタニヤが妻に何かを言いかけましたが、それも巫女の激しい訴えのなかにかき消されてしまいます。
「サンゴを採りに行くとしたら、私以上の、いえ、私以外の適任者はいません。ですが、私はその航海のなかで死んでしまうかもしれないし、そうなればテピト・テアナには、実質上の巫女がいなくなってしまうのです。
　あのアサジという子の嘆きを止めてあげられるなら、この命など惜しいとは思いません。けれど、あの子ひとりのために、島の人々すべてを路頭に迷わすことは出来ないのです」
　セフィーネは声を震わせて悲憤しましたが、そうして震える彼女の肩にコースタニヤが柔らかく手をのせ、そしてごく落ちついた声色で言いました。
「セフィーネさま、どうしてご自分が死んでしまうかのように語るのです？
　あなたには、いつも傍にいる私のことが信じられませんか。私のあなたへの愛情が、あなたを海上でむざむざと死なせてしまうほど、それほどにも弱いものだと思うのですか」
「コースタニヤ……あなた……」
「確かに、あなたには巫女の第一律がありましょう。ですが、それを破らなければ島民を助けられないという今、民を助けるために海に出ていくあなたを、はたして天の意思が罰したりするでしょうか。私には、そんな事があるとは思えないのです。それに……」
「それに？」
「それに私には、天意よりもあなた自身の後悔のほうが怖いのです。私もアサジに会いました。その上で言うのですが、あの純真な子の訴えから逃げることは、確実にあなたを、しかも長いあいだ苦しめるでしょう。
　セフィーネさま、あなたが苦しみに落ちこもうとしている前で、私が何もせずにいるなど、まずもって不可能です。たとえ、その何かすることが、まるまる天意に反することであっても」
　それでもセフィーネは不安そうに夫を見つめました。
「では、あなたは私を船に乗せてくださると言うのですね。けれど、島でも屈指の船乗りであるあなたにとって、この雨の勢いはどのように感じられるのですか。私はテピト・テアナの民たちのために、もう一度この島に戻って来られるのでしょうか」
　コースタニヤは、妻の目をしっかりと見返して言います。
「ならば誓いましょう。私は、あなたを心から愛する者として、あなたが望むことを全て

叶えると。この命にかえてサンゴの卵を手に入れ、そうして絶対にあなたを、雨で荒れる海から連れて帰りましょう、と。

（５）命の償い

この日の夜、一向に衰えることを知らない大雨のもと、巫女と勇者を乗せる一艘の船が、真っ黒な、まるで重油が渦巻いているような海を前にしていました。もちろん、サンゴの卵を採りにいくために用意された船です。

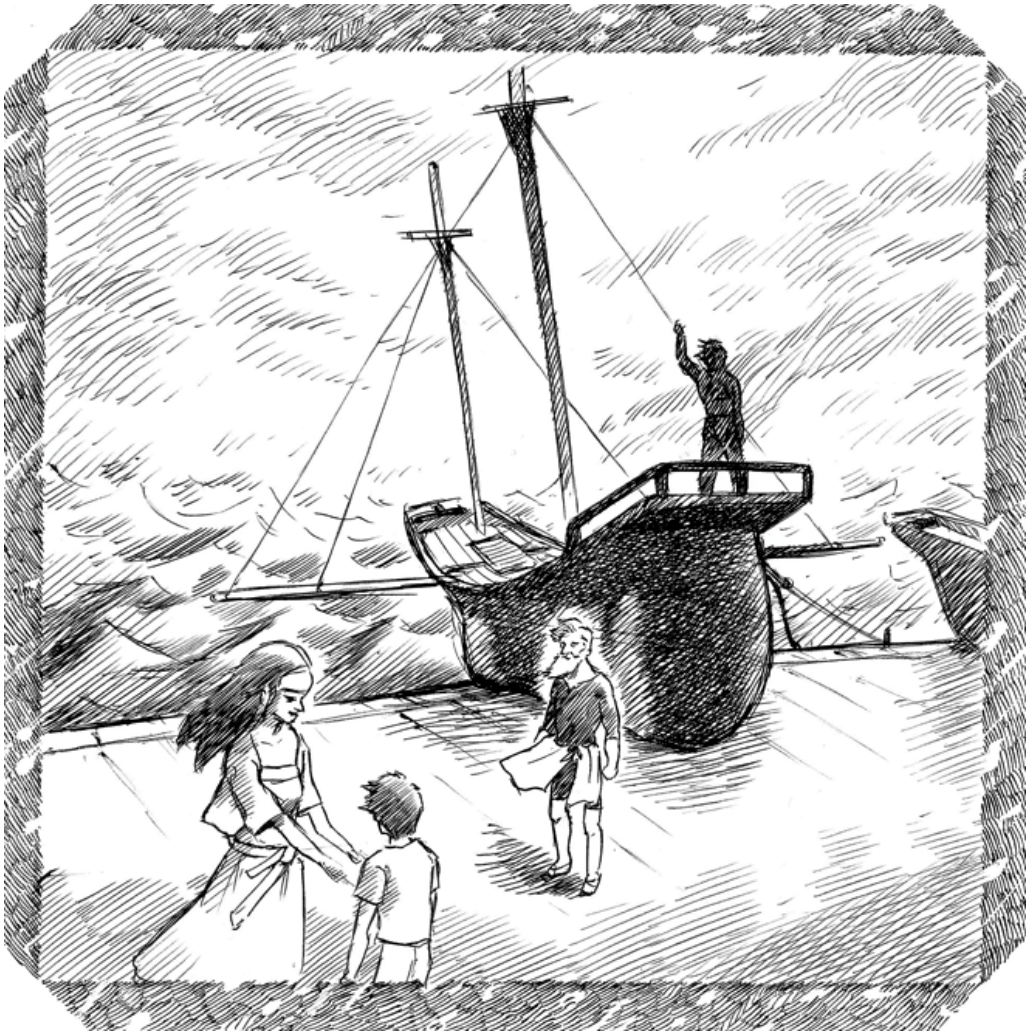
さて、大火山も「見えない柱」も共に三つあるわけですが、巫女たちは、今回、柱のまわりに岩礁があると思われる、ラノ・カウ大火山の沖合にある「見えない柱」を目指すことに決めました。

２０２２-05-30＼(３＼).png

もちろん岩礁自体は危険きわまりないものですが、しかし何らかの基点がないことには、サンゴの卵を採るさいに、船を固定することが出来ないのです。もっとも、危険を避けようというのであれば、こんな日に船を出航させるという、そのこと自体をこそ取りやめるべきでしょう。

しかし、巫女と勇者は、あくまでも海に出ていくつもりでいます。

二人が乗り込むのは、大時化の海に対応できるだけの重みを持った、島では割合に大きめの船でした。今は、その船尾にコースタニヤが立っています。彼はそこで、見送りの者たちと話しているセフィーネの後ろ姿を見つめていました。



２０２３-04-13＼(15＼).png

「そのように不安そうな顔をすることはないのです」

見送りにきた少年、つまり老勇者バッティーヤに連れてこられたアサジに、巫女セフィーネが笑って言いました。

「たしかに海は荒れています。ですが、私の夫であるコースタニヤは、生きて私を連れ帰ることを誓ってくれました。そして、これまで彼が誓いを破ったことは一度もありません。ですから、私は絶対に戻ってこられるのです。

もちろん私が帰ってくれば、あなたのお母さんも助けてあげられる。つまり、この出

航は、いわば幸せへの第一歩なのですよ。だからアサジさん、どうか私を笑顔で見送ってください」
　いくら胸に一杯の不安があったとしても、自分の願いをすべて受け入れてくれた巫女にこう言われたのでは、嘆願者のアサジとしては、どんな無理をしてでも最上の笑みを作らなければなりません。
「巫女さま、ご無事で帰ってきてください」
　そう言って、つとめて自然に、けれど実際にはきわめて不自然に笑うと、そんなアサジを見るセフィーネも、それこそ慈愛しか感じさせないような笑顔を浮かべました。そして彼女は、その笑顔のままに今度はバッティーヤのもとへ近づき、そうして父親の耳元でそっと囁きました。
「もしもの時は……どうぞチェリアのことをお願いします。寝顔を見てからここに来ましたが、本当に可愛いわが子です。私が死んだなら、お母さまと共に、どうかあの子を立派な巫女に育ててやってください」
「ばっ、馬鹿者が！　縁起でもない。セフィーネ、あまり下らんことを言うものではないぞ。チェリアを育てるのは海から帰ってきたお前たちじゃ！」
　老いた父に諌められると、セフィーネはそれに答えるでもなく、ただ、どこか諦めを匂わせるような笑顔を残して、夫コースタニヤが待っている船へと乗り込みました。
「いざ！」
　とコースタニヤの声を合図に、それまで船と船着場をつないでいた綱が解かれ、巫女と勇者を乗せた船は、ただちに黒い波頭に飲み込まれていきました。
　しばらくは船首に掲げられていた明かりが二人の所在を教えていましたが、それもすぐ暗闇に飲み込まれてしまいます。大雨が荒れた波を叩きつける音、それだけが不気味な闇夜にいつまでも響き続けていました。

　それっきりでした。
　セフィーネとコースタニヤの夫婦は、乗っていた船もろとも、二度と島に帰ってくることがなかったのです。砦での重苦しい沈黙とは裏腹に、激しい雨の音ばかりが、それこそ止むのを忘れたかのように、無情に島を賑わせていました。
　巫女と勇者が出立して五日が過ぎたころには、肝心のオロティアの容体は、もはやどうにもならないところまで行き着いていました。その日の夕方、そのまま体が浮いてしまうのではないか、と思われるほど激しい痙攣をしたのち、オロティアは息子に目を向け、渾身の力をふりしぼって、最後の言葉を伝えようとしました。
「アサジ、お前がいるから、私は恐れずに死ん、でいくことができる。ありが……とうアサジ、私の息子に生まれてきてくれ、て……」
「母さん？　母さん！」
　ここからオロティアは、何度かの激しい痙攣をくりかえし、その後わずかに小康を取り戻したかに見えました。しかし、その静けさのなか、ひとすじの涙で枕を濡らしたかと思うと、次の瞬間には、すでに息を引き取っていました。

雨がやむ気配など、露ほどもありはしません。

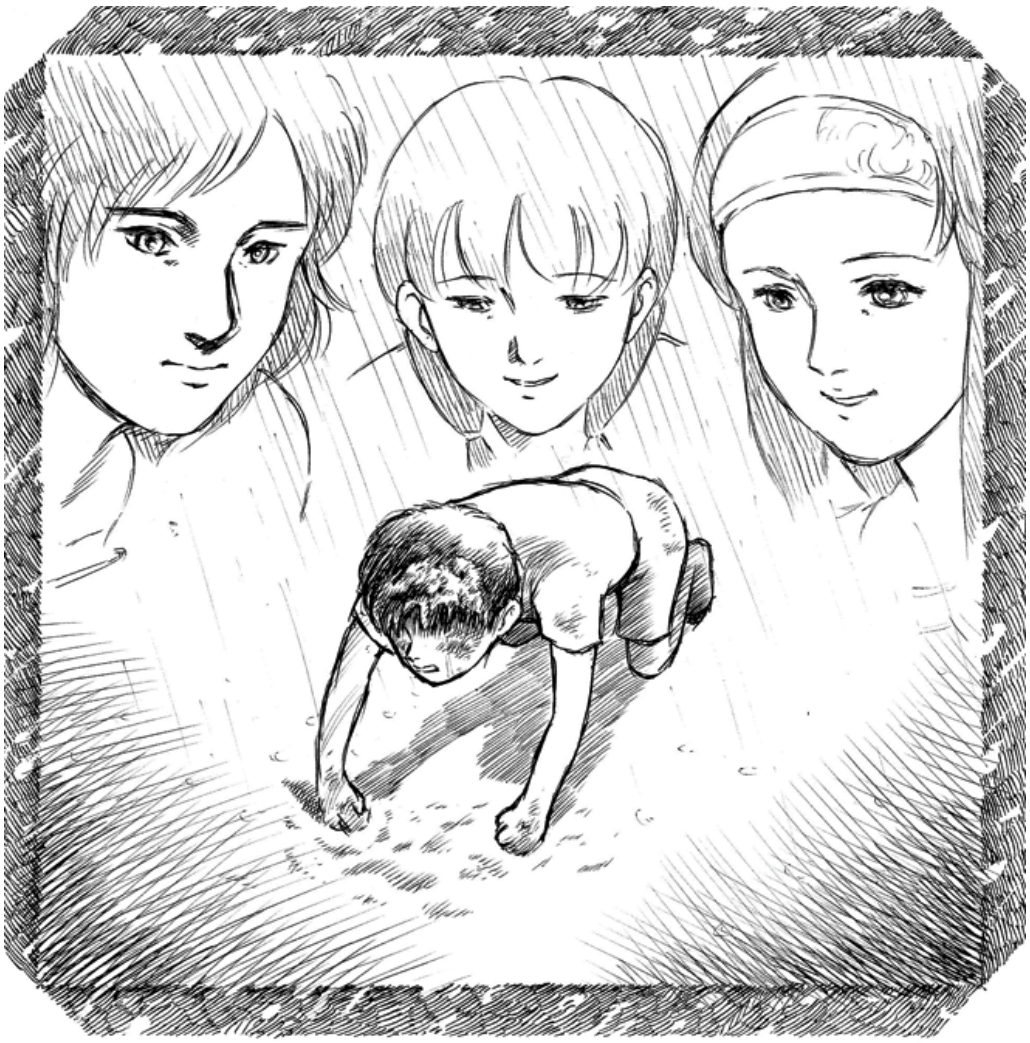
そんな雨のもと、老バッティーヤが濡れながら立ち尽くしている姿がありました。場所はオロティアたちの家の庭です。彼は窓を通して屋内をながめ、ずっとアサジの様子を見守っていたのです。

そのアサジは、今しがた息を引きとった母の涙を拭いてやると、そのあと少しだけ目を瞑ってから家の外に出てきました。そして、窓の前で立っているバッティーヤのまえで崩れ落ち、

「僕の前で、三人もの人たちが死んでしまった！」と、世にも悲痛な声をあげて泣きだしました。そして、さらに大泣きに泣いて続けます。

「僕は本当に大切な人ばかりを失ってしまった。しかも、僕がいなければ、こんな事にはならなかったんだ。少なくとも、巫女さまと勇者は僕が殺したも同然なんだ。僕の言葉のせいで……僕は人殺しになってしまったんだ！」

幼い心など、ひとたまりもないほどの自責の念がアサジを襲い、捉え、そしてどこまでも苦しめずにはおきませんでした。アサジは狂ったように頭を掻きむしり、傍らの泥をつかんでは、再びその手で頭を掻きむしりました。



２０２３-04-13＼(16＼).png

「僕が無理を言わなければ、死ぬのは母さんだけで済んだんです。なのに、僕の言葉は、島でいちばん大切な人たちの命まで奪ってしまいました……

ごめんなさい、ごめんなさいバッティーヤさま、大切な巫女さまと勇者を……どうか僕を殺してください。このまま生きていく資格なんて、人殺しの僕には少しもないんです。だからどうか、どうか、今すぐその手で僕の命を断ち切ってしまってください、

アサジは、そう言ってバッティーヤの前に土下座し、さらに何度も地に頭をすりつけて同じ言葉を繰り返しました。自分を殺してくださいと、どうか殺してください、と。

そうした哀れなアサジを見下ろしながら、ついにバッティーヤが口を開きます。

「……アサジ、わしはお前に償ってもらう。なにしろ大事な娘を、その娘婿もろとも奪われたんじゃからな。少しぐらいの償いを求めるのは当然のことだろう」

「……はい、そうです。その償いはこの僕の命で」

「いらぬわ、そんなもの。死人がわしに対して何を償えるというのじゃ。のう、おい、何も出来んだろうが、馬鹿者め。

　じゃがな、殺しはせぬが、わしはお前の命を貰うぞ。お前の命を、お前の人生の一切をわしの自由にさせてもらう、そういうことだ。アサジ、それを納得するか」
　そのバッティーヤの言葉に、激しい怒気が込められていたため、アサジは、これ以上へりくだる事はできない、という、それほどの平身低頭ぶりで答えました。
「僕の命で償いができるなら、それこそ本望です。よろこんでバッティーヤさまの言うとおりに生きます。何であろうと言うことをききます」

「よし、ならば果たせよ、アサジ。島の勇者になることを！」
「え……ゆ、勇者に……？」
　呆気にとられるアサジをよそに、老人はしごく雄弁に語り出しました。
「わしの手に残されたチェリアは、まだ八つだというのに、今回のことで親を二人とも失ってしまった。ああ、まったく不憫な孫娘と言うほかないわい。じゃが、いくら不憫だと嘆いても、巫女の血統を受けついでおる以上、チェリアはいつかは島の巫女にならねばならない」
（チェリアさま……あの、セフィーネさまと遊んでいた小さな女の子のことだ。そうなんだ、あの子がいつか島の巫女になるんだ）
「こういう事態となった以上、とりあえずは、このバッティーヤが勇者の仕事を。そしてわしの妻が、セフィーネに代わって巫女の仕事を果たすだろう。
　ともに一度引退した身じゃし、いかにも老いぼれとるが仕方ない。わしらが巫女と勇者になる。たぶん名目上のものにしかなれんが、それでも巫女と勇者を不在にする訳にはいかんからの。
　じゃがなアサジ、じゃが、いつかは必ず、チェリアが、わしの妻に代わって巫女となる時がくる。島の巫女となって、あの子の母がそうしたように、ただ島人たちの幸せのために献身して生きていくのだ」
「はい……」
「ならばアサジ、その時おまえは島の勇者であれ。勇者となって、全身全霊をかけてチェリアを助けるのだ。
　巫女が苦境にあれば、その時お前は、自分の命を捨ててでも巫女を支えなければならない。そのとき、お前にお前のための命なく、お前は、ただ巫女のために生き、そして巫女のために死ぬのだ。わかるか」
「ただ巫女のためだけに生きる……」
「そうじゃ。アサジ、さきほどお前は自分を殺してくれと願った。安心するがいい。何年かの後、お前がもし島の勇者となれなかったら、そんな不甲斐ないお前を、このわしが絶対に殺してやる。
　また、よしんばお前が勇者になれたとしても、チェリアが苦しんでいるとき、お前がそれを黙って傍観していたら……分かるな、その時も同じように、わしはお前を許しはしないじゃろうよ。
　よってアサジよ、お前に命ずる。今日からわしと暮らし、わしの訓練を受けよ。そして、いつか行われる競技会を勝ちぬき、必ずや勇者となれ。そうして勇者となり、命あ

るかぎり巫女を守るのだ！」

アトラスⅠ

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社